

## 露地イチゴの苗質及び花芽数向上技術

佐藤 俊・高橋寿一\*・高橋康利・阿部 隆\*\*

(岩手県園芸試験場南部分場・\*岩手県園芸試験場高冷地開発センター・\*\*岩手県園芸試験場)

Methods for Increasing the Numbers of Flower Bud and Improving  
the Quality of Nursery Plants in Open Field Strawberry  
Syun SATO, Toshiichi TAKAHASHI\*, Yasutoshi TAKAHASHI and Takashi ABE\*\*  
(Southern Branch, Iwate Horticultural Experiment Station・\*Highland  
Cool-zone Development Center Iwate Horticultural Experiment  
Station・\*\*Iwate Horticultural Experiment Station)

### 1 はじめに

岩手県におけるイチゴの作型は、盛岡16号を用いたハウス半促成栽培と露地栽培が主体である。盛岡16号は、果実の硬さ、食味、光沢など果実形質が優れており、業務用イチゴとして評価が高い。しかし、栽培面では着果数が少なく収量が低いことや、黒斑病が発生しやすい等の問題がある。特に露地栽培では、花芽分化期にあたる秋の気象条件が翌年の収量に大きく影響し作柄の不安定要因となっている。このため苗質及び花芽数向上技術等による生産安定技術について検討した結果、実用的な成果を得たので報告する。

### 2 試験方法

(1) 試験場所 岩手県園芸試験場南部分場

(2) 試験内容

試験1 仮植時期と収量 (1988年, 1989年)

①6月25日 ②7月5日 ③7月15日 ④7月25日

試験2 親株床保温による苗増殖法 (1988年)

a. 保温方法

①ハウス ②トンネルA (ユーラックカンキ5号)

③トンネルB (ベルタフN2050) ④トンネルC

(タフベル) ⑤無処理

b. 保温期間 3月3日～5月31日

c. 換気方法 ハウス区は日中25°Cで換気, トンネルB区は日中トンネルの両端を換気, その他の処理区は無換気。

試験3 花芽数向上技術

a. 保温方法

①ハウス+トンネル ②ハウス ③不織布べたがけ

(タフベル) ④トンネル (ユーラックカンキ5

号) ⑤無処理 (慣行)

b. 保温期間 処理区①②は1987年11月1日～12月31日

処理区③④は1989年11月1日～12月15日

試験4 雨よけ期間と品質 (1987年)

a. 雨よけ期間 ①開花始期～収穫終期 ②収穫始期～収穫終期 ③対照区 (露地)

b. 遮光の有無 シルバータフベル (遮光率60%) で晴天日の日中 (10～15時) のみ遮光。なお遮光処理区は雨よけ期間区と組合せた。

(3) 供試品種 盛岡16号

(4) 試験規模

試験1, 3, 4は1区3.4m<sup>2</sup> (20株) 2区制

試験2は1区10m<sup>2</sup> (10株) 1区制

(5) 耕種概要

1) 仮植期 7月20日～7月27日

2) 定植期 9月20日～9月27日

3) 栽植様式 畦幅135cm 株間25cm 2条植

4) 施肥量 (kg/a) N; 1.2, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>; 1.2, K<sub>2</sub>O; 1.2 堆肥; 200

### 3 試験結果及び考察

(1) 仮植時期と収量

定植時の苗は 仮植時期が早いほど全重, クラウン径が優り大株となった。また花房数, 着果数も仮植時期が早いほど多く, 収量も早期仮植ほど優る傾向を示した。

(2) 親株床保温による苗増殖法

ランナー, 子株の発生数は, 保温効果の高いハウスが最も多く次いでトンネルB区 (ベルタフ) であった。しかし,

表1 仮植時期の違いによる収量

(40株当り)

仮植時期	A		B		くず果		病果 個数	a 当り 収量 (kg)	収量比 (%)
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)			
6/25	710	5,716	234	3,132	352	1,360	16	126	168
7/5	551	4,663	257	3,276	459	1,806	15	113	151
7/15	419	4,337	175	2,131	360	1,407	17	92	123
7/25	439	3,633	126	1,582	393	1,423	2	75	100

注. A: 良果, B: 形状劣るが販売可

いずれも晴天時に最高気温が33~38℃と高くなりすぎるために、換気作業が必要であった。

換気作業を必要としないトンネルA区(ユーラックカンキ5号)は、慣行の無処理区に比較し7月中旬で約2倍の苗が得られ最も実用的な処理区と考えられた。

(3) 花芽数向上技術

花芽数増加法として、秋期にハウス、トンネル及びべたがけ資材で保温を図った。

ハウス保温区は平均気温が10℃(最低気温5~6℃)になる11月上旬から12月下旬までの保温で増収効果が認められた。なお、ハウスの温度管理は5℃~15℃になるように

管理した。

トンネルによる秋保温の増収効果はすでに報告済みであるが<sup>1)</sup>、不織布べたがけによる秋保温も同様に効果があることが認められた。

(4) 雨よけ効果

露地栽培は灰色かび病の発生が大きな問題となるが防除対策として、雨よけ効果について検討した。その結果、収穫始めから収穫終わりまで雨よけすることにより、灰色かび病果率が大幅に軽減し良果収量が向上した。

なお雨よけと遮光を組合せて品質向上効果を検討したが遮光の効果は認められなかった。

表2 親株床保温と子苗発生数

(7月20日)

保温方法	ランナー発生数(本)	葉数別子株数(個)						2~5葉合計(個)	比(%)	
		1	2	3	4	5	6以上			
ハウス	18.2	22.0	22.8	20.4	12.0	3.4	2.6	58.8	305	
トンネル	A ユーラックカンキ5号	13.8	11.0	12.5	10.5	12.0	4.0	1.2	39.0	203
	B ベルタフN2050	15.2	13.0	15.6	17.6	9.0	4.8	1.8	46.8	244
	C タフベル4000-N	11.8	11.4	16.4	13.8	7.8	2.4	1.6	40.4	210
露地	8.8	8.3	7.7	7.6	3.2	0.7	0	19.2	100	

表3 秋期保温と増収効果

(40株当り)

年次	保温方法	A		B		くず果		a当り収量(kg)	比(%)
		(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)		
1987	ハウス+トンネル(11~12月)	724	6,712	461	5,350	200	911	172	138
	ハウス(11~12月)	662	6,019	487	5,240	175	802	161	129
	露地	488	4,951	292	3,814	108	492	125	100
1989	べたがけ:タフベル(11/1~12/15)	616	5,606	212	2,924	200	906	122	137
	トンネル:ユーラックカンキ5号(11/1~12/15)	650	5,922	216	2,612	210	916	122	137
	露地	468	4,077	172	2,160	469	1,767	89	100

注. A, Bは表1参照

表4 雨よけ効果

(40株当り)

雨よけ期間	A		B		くず果		病果 <sup>a</sup> (個)	病果率 <sup>a</sup> (%)	a当り収量(kg)	比(%)
	(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)				
① 開花始~収穫終遮光なし	537	4,917	361	4,417	200	651	5	0.5	133	115
② 開花始~収穫終遮光有	402	3,206	315	3,290	295	999	11	1.1	94	81
③ 収穫始~収穫終遮光なし	634	5,835	387	5,015	220	972	18	1.4	155	134
④ 収穫始~収穫終遮光有	561	4,828	338	3,991	193	839	10	0.9	126	109
⑤ 露地	406	4,153	294	3,981	120	510	83	9.2	116	100

注. A, Bは表1参照 a:灰色かび病罹病

4 まとめ

盛岡16号を用いた露地栽培の生産安定を図るために、苗質や花芽数向上方法を検討し、以下の結果を得た。

(1) 仮植時期が早いほど(6月下旬~7月上旬)大株となり、増収する。なお、早期苗確保のためには、ハウス及びトンネルの保温効果が高かった。

(2) 花芽数増加のための秋保温方法は、ハウス、有孔ポリトンネル、不織布べたがけのいずれも有効であり、管理

作業等を考慮すると不織布べたがけが最も実的であった。保温開始時期は、平均気温10℃(最低気温5~6℃)が適期である。

(3) 収穫始めからの雨よけは、灰色かび病が軽減され、良果収量が向上する。

引用文献

1) 阿部 隆, 吉池 貞蔵. 夏どりイチゴの栽培法. 東北農業研究 33: 31-232.